

栗田幸雄元知事逝く



真実一路 福井発展の礎を築く

4期16年福井県知事として県政発展に尽くし、幾多の功績を残し、現在の福井発展の礎を築く。退任後も福井を離れることなく各般で活躍。心から福井を愛した栗田氏の突然の訃報に県民は驚き、別れを惜しむ。

昭和62年から平成15年まで4期16年にわたり福井県知事を務めた栗田幸雄氏が5月17日、永眠された。享年94歳。

栗田氏は今立郡鯖江町(現鯖江市)に生まれ、惜陰小学校に入学。その前年に、31年後に県知事となる中川平太夫氏が教師として赴任して、この運命的出会いが40年後に大きな転機となる。副知事として9年半務め、昭和62年中川知事の後継として知事選に出馬し初当選する。

就任後は、県民一人ひとりが豊かに幸せに暮らせる福井県にしたいと、全国に先駆けて『生活満足度日本一』を目標に掲げ、その実現に向け県政発展に全精力を注ぐ。この間、県立大の開学やハーモニーホールふくい(県立音楽堂)、県立図書館の開館など大型施設を整備し豊かな郷土づくり、さらに国際交流など文化の発展にも貢献。県立恐竜博物館も整備し「恐竜王国福井」の礎を築いた。

また北陸新幹線は早期着工を求めて国会議員に陳情を重ね、副知事時代から心血を注いだ福井空港拡張整備計画は全国的な公共事業削減の波と地元住民の反対により、自ら計画の凍結を宣言。原子力政策では、県内原発15基体制を維持、使用済み核燃料の中間貯蔵施設を巡っては

県外立地が基本との姿勢を示した。

一方で高速増殖原型炉「もんじゅ」のナトリウム漏れ事故や美浜原発2号機事故、国道305号崩落事故、重油流出事故、えち鉄追突事故による廃線問題、カラ出張問題等々様々な難題にも逃げることなく真摯に立ち向かった。そこには「ふるさと福井に恩返しをしたい」という強い思いが支えになっていた。

平成16年秋の叙勲では、地方自治功労者として旭日大綬章を受章。退任後も、ふるさと福井を離れることなく、県国際交流協会理事長、県立大学名誉客員教授、日本赤十字社福井県支部顧問などを歴任し、県の発展のために尽くされた。

老後を楽しく過ごすためにラジオ体操やウォーキングを欠かさずゴルフなど多趣味で「いくつになっても目標を持つことが大切」と意気軒昂、常にトレードマークの笑顔を決やさなかった。

誰からも愛され、福井県の慈父の如く慕われた栗田氏の突然の訃報に、政財界はもとより多くの県民が別れを惜しむ。

栗田氏の座右の銘「真実一路」、そのまの人生を生き抜いた信念の人であり、後人の範とする人物である。